

◇ 曲 目 解 説 ◇

シューベルト 交響曲 ロ短調「未完成」 D759

フランツ・シューベルト（1797–1828）は、「野ばら」や「魔王」（いずれも 1815 年）といったゲーテの詩による歌曲、あるいは日本語訳「ねむれ、ねむれ、母の胸に」の歌い出しで親しまれる「子守歌」（1816 年）などによって広く知られている。詩と音楽を緊密に結びつける表現や、ピアノ伴奏に独自の役割を与える書法によってドイツ歌曲（リート）の新たな可能性を切り拓き、生涯で 600 曲を超える歌曲を遺したことから「歌曲の王」と称される一方、室内楽や交響曲にも重要な作品を残した。なかでも交響曲 ロ短調 D759「未完成」は、逸話の多さゆえに語られることの多い作品ではあるが、その歩みを辿ることで、音楽史的にも示唆に富む側面が浮かび上がってくる。

シューベルトの器楽作品が後世どのように受け止められていったかを考えるうえで、ロベルト・シューマン（1810–1856）とフェリックス・メンデルスゾーン（1809–1847）の存在は欠かせない。シューマンは「私にとってシューベルトは至高の存在」と記し、その歌曲や舞曲に深く傾倒した人物であった。1839 年にウィーンを訪れた際には、ベートーヴェンとシューベルトの墓を詣で、さらにシューベルトの兄フェルディナントのもとで交響曲 ハ長調（いわゆる「ザ・グレート」）の自筆譜を発見する。この交響曲を初演したのがメンデルスゾーンであり、その成功は、シューベルトの交響曲が「ベートーヴェン以後」の音楽史の中で新たな位置を占める契機となった。しかし、こうした評価の高まりの中にあっても、「未完成」はなお長く世に知られぬ存在であり続けた。

「未完成」という呼び名は、もちろんシューベルト自身によるものではなく、後世に付された愛称、いわばニックネームである。本作が初めて世に示されたのは、1865 年 12 月 17 日、シューベルトの死から 37 年後のことであった。初演を指揮したのは、当時ウィーンで活躍していた音楽家ヨハン・ヘルベック。そのきっかけを作ったのがシューベルトの友人ヨーゼフ・ヒュッテンブレンナーであった。彼は 1850 年、兄アンゼルム・ヒュッテンブレンナーの書庫にシューベルト自筆の総譜が残されていることをヘルベックに伝えている。さらに 5 年後の「未完成」初演では兄アンゼルムの作品も抱き合わせで演奏されており、弟ヨーゼフが兄の作品に演奏機会を与えるためにこの楽譜を持ち出したという、現実的な事情もうかがえる。

アンゼルムの蔵書に遺されていたこのロ短調交響曲のスコアの表紙には、「1822 年 10 月 30 日」と記されており、初演から遡ること実に 33 年、シューベルト 25 歳の秋の作品ということになる（ただし、この筆跡について疑義も呈されている）。第 1 楽章と第 2 楽章のみが完成し、第 3 楽章は 9 小節のみが書かれていたが、以降は「切り取られた」状態であった。こうした経緯を受け、出版時には初版から“Zwei Sätze der unvollendeten Sinfonie in H-moll (未完の 交響曲 ロ短調 の二つの楽章)”と記されることとなった。

なぜこの交響曲が未完に終わったのかについて、シューベルト自身の手紙や記録には直接の言及がなく、その理由は長らく明らかにされてこなかった。後年、ヒュッテンブレンナーは、「シューベルトがシュタイエルマルク音楽協会の名誉会員に選ばれた際、交響曲の献呈が約束され、二つの楽章まで完成したところでアンゼルムに渡されたものの、その後続きを受け取ることはなく、忘れられてしまったのだ」と説明している。しかし、このやや不自然にも感じられる経緯の真偽を含め、「未完成」をめぐるのは、さまざまな憶測が語られてきた。「恋の挫折によって作曲が中断された」というロマンティックな解釈が広まり、映画の題材となったことも、その一例といえよう。

なお、「未完成」が初演された 1865 年は、リヒャルト・ワーグナーが楽劇「トリスタンとイゾルデ」をミュンヘンで初演した年でもあった。調性の枠組みを極限まで拡張し、後期ロマン派から 20 世紀音楽へと至る流れを決定づけたこの作品は、19 世紀の音楽界が大きな転換点に差ししかかっていたことを象徴しているが、シューベルトの「未完成」は驚きと称賛をもって迎えられたという。

ところが、20 世紀も後半に差し掛かった 1969 年、「切り取られた」第 3 楽章後半にあたる総譜の断片が、ウィーン男声合唱団の保管資料から発見された。その楽想は途中で途切れ、続く五線紙は白紙となっていたため、シューベルトが総譜化の途中で筆を止めた可能性が高いことを示すものであった。こうして「未完成」は単なる「未完の作品」ではなく、創作の途上にあった一瞬を封じ込めた作品として理解されるようになった。



この作品の真の魅力は、これらの逸話や謎そのもの

にあるものではない。深い陰影をたたえた第1楽章、静かな諦観と慰めが交錯する第2楽章は、わずかに二つの楽章でありながら、後期ロマン派を先取りしたきわめて高い表現力と完成度を備えており、未完とされるがゆえに、その音楽は今なお聴き手の想像力を喚起し続けている。

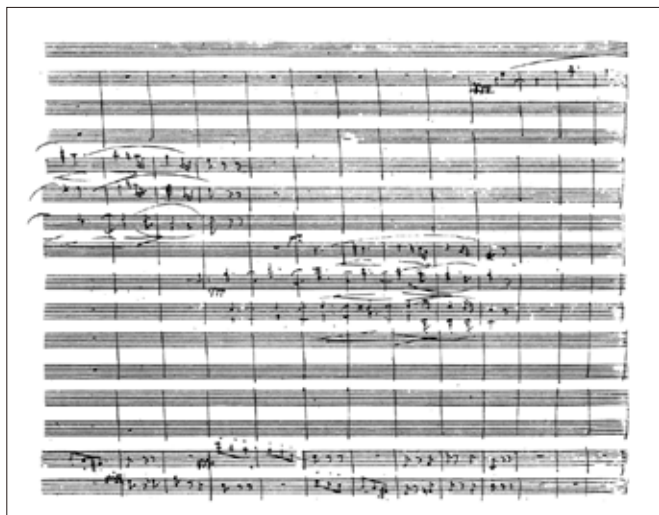
第1楽章 アレグロ・モデラート（ロ短調）

地下へと沈み込んでいくかのようなチェロとコントラバスの低音によって開始され、弦のざわめく伴奏を背に、オーボエとクラリネットが弱音で主題を提示する。続いて現れる慈愛に満ちた第二主題はチェロによって歌われ、抒情的な広がりをもたらしている。

ロ短調という調性は当時きわめて異例であり、先人たるハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの交響曲群には前例がない。充実した木管楽器の扱いに加え、三本のトロンボーンが効果的に用いられ、弱奏の場面においても和声的・色彩的な役割を担っている点は、交響曲史上最も先駆的なものといえるだろう。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート（ホ長調）

冒頭、ホルンとファゴットによる静かな和声の上に、ヴァイオリンが高音域で主題を奏でる。息の長い旋律は、遠くから差し込む光のように立ち現れ、静謐な空間を形づくる。続いて第二主題がクラリネット、さらにオーボエへと引き継がれるが、弦楽器はシンコペーションによる持続音でこれを支え、「歌心」をいっそう際立たせている。やがて全合奏による力強いクライマックスが現れ、短調的な陰影が一瞬顔をのぞかせるが、葛藤ののちに音楽は再び落ち着きを取り戻し、冒頭主題が姿を変えて回帰する。



譜例1 第2楽章 271～283小節

終結部では、最弱音のヴァイオリンが引き延ばされた主題を奏でる。音楽は次第に力を失いながら、終着点を探るかのように漂う。きわめて薄い、抑制されたオーケストレーション（譜例1）によって紡がれる余韻のなかで、ホルンが二度奏する下降音型が静かな着地点を示し、最後は弦のアルペジオとピッチカートおよびティンパニに導かれ、ホ長調の和声によりそっと閉じられる（譜例2）。



時代はやや前後するが、シューベルトが遺し、生前出版された代表作、歌曲集「冬の旅」(D911, 1827年)から、その心象風景を象徴する一節を引いて、この項を結びたい。

道ばたに立つ一本の道しるべは
街の方向をさしている
それなのに私ははてもなくさすらう
憩いなく 憩いを求めて

完成へと至らぬまま筆を置かれた「交響曲 ロ短調」は、この「道しるべ」の詩と同じく、定まった終着点を示してはいない。

それでもその音楽は今なお、私たちに静かに、しかし確かに揺さぶり続けていく。

(I.T.)

参考文献：前田昭雄『シューベルト』（新潮文庫）
前田昭雄『フランツ・シューベルト』（春秋社）
中川右介『未完成 — 大作作曲家たちの「謎」を読み解く』（角川 SSC 新書）
石川亮子『シューベルト 交響曲第7(8)番 ロ短調 D.759《未完成》』（全音楽譜出版社）



譜例2 第2楽章 終結部 (298～312小節)

Holograph manuscript, 1822; Munich: Drei Masken Verlag, 1923

1840年6月24日から3日間にわたり、ライプツィヒでは市を挙げての盛大な祝祭がとりおこなわれた。印刷術の発明から400年を記念する、いわゆる「グーテンベルク祭」である。西洋における活版印刷術の発明者であるヨハネス・グーテンベルク（1400頃–1468）の名にちなみ、洗礼者ヨハネの聖名祝日である6月24日（夏至祭）に合わせて開催されたこの祭のプログラム冊子を開くと、活版印刷にかんする展示、ミサ、パレード、イルミネーション、舞踏会、演劇そして「民衆の祭 Volksfest」といった、さまざまなイベントで盛りだくさんの3日間だったことがうかがえる。

遡ること1835年にライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任したフェリックス・メンデルスゾーン（1809–1847）が、この祝祭にふさわしい新作の委嘱をライプツィヒ市当局から受けたのが1839年初頭のこと。年間20回のゲヴァントハウスの定期演奏会をはじめとした演奏活動で多忙をきわめていたメンデルスゾーンは、当局の希望する大規模なオラトリオではなく、詩篇にもとづくカンタータないしは小規模なオラトリオを計画していたようである。本格的な曲作りに着手するのは1840年春になってから、委嘱とは別に書き進められていた「変ロ長調交響曲」に、過去に書いた声楽曲などを取り入れつつ、作曲が急ピッチで進められた。

そしてグーテンベルク祭2日目の6月25日、バッハゆかりのトーマス教会で開催された演奏会で、「讃歌」は作曲者自身の指揮のもと、総勢500名を超える音楽家と歌手によって初演された。

時間に追われるなかで完成させた「讃歌」初演稿は、実態としては寄せ集めであり、一貫したコンセプトにもとづく作品と呼べるものではなかったようである。とはいうものの、時間さえ許せばさらなる彫琢をほどこせると考えたのか、メンデルスゾーンは初演後から改訂にとりかかる。そして11月末にあらためて完成、12月頭のゲヴァントハウスでの再演を経て、翌1841年に『讃歌——聖書の言葉による交響カンタータ』というタイトルで出版された。初演稿に較べると楽曲が増え、主にテナーの独唱部分が拡充されたことにより、後述する「闇から光へ」のドラマトゥルギーがいっそう明確になった。

本作品は作曲者の死後「交響曲第2番」とされてきた。というのも、のちに完成した「スコットランド」交響曲（1841）の初版出版時に、作曲者自身が「第3番」という番号を与えたが、「第2番」が欠番のまま残されていたためである。作品の構造ゆえにベートーヴェンの「第九」になぞらえて語られていたことも影響したのだろ

う。そして「讃歌」以前に一度は完成していた「イタリア」「宗教改革」両交響曲には、いずれも死後の出版順にそれぞれ「第4番」「第5番」のナンバリングが施された。作曲者自身が生前に「交響曲」という扱いをしていなかったことを鑑み、「讃歌」は最新のメンデルスゾーン作品目録では声楽曲のカテゴリに分類されている。



「讃歌」のテーマとなっているのは大きく二つ。「主の賛美と主への感謝」そして「闇から光へ」である。前者はもともと祝祭的なカンタータとして書かれた経緯からあきらかであるとしても、後者は、われわれのいる暗闇を照らし夜明けをもたらすという「神による救済」のメタファーのみならず印刷技術がひとびとに“知”という「光の武具」をもたらしたというルター派的な啓蒙のイデオロギーも内包していることが重要である（「グーテンベルク祭」自体がそのような理念とともにあった）。より多層的にみるならば、メンデルスゾーン自身も、そしてメンデルスゾーンが前作となるオラトリオで描いた使徒パウロもまた、ユダヤから「目覚めた」改宗者であった。

そして、説教師としてレチタティーヴォを担うテナー独唱の役回りや、よく知られたコラル（賛美歌）を取り入れるなど、バッハのカンタータや「マタイ受難曲」にみられるルター派の礼拝音楽の作法が存分に活かされている点も見逃せない。カンタータであるがゆえオラトリオのような一貫したドラマ性こそ持たないものの、楽曲間の連続性が強く意識され、全体がほぼ休みなく奏されるのもこの作品の大きな特徴である。このコンセプトは、「讃歌」の成功に弾みをつけたメンデルスゾーンが1841年に完成させることになる「スコットランド」交響曲にも引き継がれた。

第1曲 シンフォニア

器楽のみで演奏される「交響曲」にあたる第1曲は、快活で推進力にみちた第1楽章、哀愁の抒情あふれる第2楽章、あたたかな祈りの第3楽章の3部分から構成される。

第1楽章の序奏ではまずトロンボーン3本がユニゾンで作品全体のモットーとなる主題（譜例）を高らかに吹き鳴らし、それに管弦楽が和声をつけて応答する。「生きとし生けるすべてのものよ、主をたたえよう」と歌われることになる主題が管弦楽の総奏で朗々と力強く示されると、和音の打撃により音楽はいきなりトップギアに入。主部ではわき立つようなリズムの主要主題を基調に、流

麗なメロディやきらびやかなパッセージが次々と繰り出され、要所要所でモットー主題も絡みつつ、一気呵成に駆け抜けてゆく。そしてクライマックスであらためてトロンボーンのもットー主題が回帰すると、クラリネットのカデンツァによる物憂げなモノローグを経て、音楽は休みなく次の楽章へ。

ト短調の第2楽章では華やかな祝祭から一転、翳りと哀しみをおびた旋律がピツィカートの伴奏にのせて運ばれてゆく。途中、天から光が差し込むかのように管楽器のコラールがト長調で響きわたる。だがここではまだその恩寵が地上の苦難へと届くことなく、弦楽器はもがきつづけ、嘆きの声はやがて弱々しく消えゆく。

続く第3楽章は「レジオーソ（敬虔に）」と指示されたニ長調の緩徐楽章。ふくよかで慈愛にあふれた響きが、安息のひとときを与えてくれる。中間部で不意に短調と付点のリズムがあらわれるが、それもやがて主旋律を支える心地よいざわめきとなって、優しく、そして温かく曲を閉じる。



Al - les, was O-dem hat, lo - be den Herrn,
譜例 モットー主題（「生きとし生けるすべてのものよ、主をたたえよう」）

第2曲 合唱「生きとし生けるすべてのものよ」

おだやかに締めくくられたシンフォニアの静寂の彼方から、第3楽章中間部のリズムにのせてモットー主題が重ねられてゆく。さながらこの讃歌を歌うためにひとびとが参集してきたかのように、合唱が息を合わせて「生きとし生けるすべてのものよ」と力強く呼びかける。

続いてモットー主題に歌詞を乗せて高らかに歌い上げると、音楽は勢いを増して「弦をかき鳴らし」「歌を歌って」と管弦楽と合唱がともに主をたたえあう。

賛美の合唱が大団円を迎えると、音楽はやや落ち着いた響きを見せ、ソプラノ独唱が女声合唱をともなって内なる魂へとやさしく呼びかける。

第3曲 レチタティーヴォ「唱えるのです」

晴れやかな賛美から一転して厳粛な音調へ。テナー独唱が牧師の説教さながらに語りかけ、主への賛美を唱える理由が説かれる。後半のアリアでは、主の慈悲深さが切々と歌われる。

第4曲 合唱「唱えるのです」

テナーの独唱を会衆である合唱が受けとめ、ほぼ同じ歌詞によって反芻する。

第5曲 二重唱と合唱「私は主を待ち焦がれました」

ふたりのソプラノが、主の恩寵をねがってやさしく歌う。ホルンのオブリガートは、天上からの光のように、あたたかく伸びやかな響きで歌に寄り添う。

ちなみにここではじめて歌詞に「私 ich」が登場し、個人の信仰告白に焦点があてられ、さらに合唱が加わることで、思いをともにする会衆との交歓もまた強調される。

第6曲 アリア「死の綱が私たちに巻きつき」

ふたたびテナー独唱が、暗闇からの救済を説く。主の言葉に思いを馳せるが場面は急転。不穏にざわめく弦楽器のトレモロを背景に、「夜は明けるのか」とすがるように問いかける。しかし答えは返ってこず、木管楽器のこだまが空しく響きわたる。旧約聖書のイザヤ書にある禪問答のようなやりとりが繰り返され、ついには絶望の淵に立つ。ソプラノが夜が去ったことを宣言し、やわらかな光明とともに第7曲へとなだれ込む。

第7曲 合唱「夜は過ぎ去り」

ティンパニとオルガンが鳴り響き、弦楽器がキラキラと光彩を放つなか、トランペットが高らかにソプラノの宣言をなぞると、合唱が口々によるこびの凱歌をあげる。

第8曲 コラール「さあ、みなで神に感謝しましょう」

日が昇り、澄みわたる空の下で神への感謝をこめて歌われるコラールは、マルティン・リンカルト（1586–1649）の作による。ルター派の会衆に広く歌い継がれてきた賛美歌。はじめ合唱がアカペラの清らかなハーモニーで第1節をゆったりと歌ったのち、管弦楽が加わる。弦楽器・フルート・クラリネットがやわらかく立ちのぼる雲のように響きの輪郭を縫いにとってゆくなか、今度は合唱がユニゾンでコラルの第3節を、オルガンの和声に支えられながら力強く歌う。歌詞の末尾3行には改変が施され、「闇から光へ」のイメージが加えられている。

第9曲 二重唱「ゆえに私はみずからの歌で」

テナーとソプラノの二重唱で、あらためて神への感謝を説く。ふたたび「私」を主語とする歌詞は、先ほどの共同体として歌ったコラルを、個の祈りとして昇華しつつ補完する内容。

第10曲 最終合唱「民衆たちよ」

もののしくオルガンの和音が響きわたるなか、合唱の各パートがそれぞれ「民衆」「王侯」「天」「地」へと、主への帰依を呼びかける。ト短調で始まった古風で勇ましい音楽は、続いて変ロ長調の巨大な奔流へとなだれこみ、主への感謝と賛美の大合唱が繰り広げられる。そして最後、壮大なフィナーレの結末に冒頭のモットー主題がもう一度回帰して、晴れやかにしめくくる。

(W.N.)

主要参考文献：星野宏美『メンデルスゾーンのスコットランド交響曲』（音楽之友社）

星野宏美『メンデルスゾーンの宗教音楽 ― バッハ復活からオラトリオ“パウロ”と“エリヤ”へ』（教文館）

「讃歌」 歌詞対訳

Texte des Lobgesanges

原詞はルター訳の聖書からメンデルスゾーンが自由に改変を加えたもの

Nr. 1 Sinfonia

[I] *Maestoso con moto - Allegro -*

[II] *Allegretto un poco agitato -*

[III] *Adagio religioso*

Nr. 2 *Allegro moderato maestoso* [Chor]

Alles, was Odem hat, lobe den Herrn.

Halleluja, lobe den Herrn.

Allegro di molto

Lobt den Herrn mit Saitenspiel,

lobt ihn mit eurem Liede.

Und alles Fleisch lobe seinen heiligen Namen.

Molto più moderato ma con fuoco [Sop. & Chor]

Lobe den Herrn, meine Seele,

und was in mir ist, seinen heiligen Namen.

Lobe den Herrn, meine Seele,

und vergiß es nicht, was er dir Gutes getan.

Nr. 3 *Recitativo* [Ten.]

Saget es, die ihr erlöst seid durch den Herrn,

die er aus der Not errettet hat,

aus schwerer Trübsal, aus Schmach und Banden,

die ihr gefangen im Dunkel waret,

alle, die er erlöst hat aus der Not.

Saget es! Danket ihm und rühmet seine Güte!

Allegro moderato

Er zählet unsre Tränen in der Zeit der Not,

er tröstet die Betrübten mit seinem Wort.

Saget es! Danket ihm und rühmet seine Güte!

Nr. 4 *Chor A tempo moderato*

Sagt es, die ihr erlöst seid

von dem Herrn aus aller Trübsal.

Er zählet unsere Tränen.

Nr. 5 *Andante* [Duett (Sop. & Mezzo-Sop.) & Chor]

Ich harrete des Herrn, und er neigte sich zu mir

und hörte mein Flehn.

Wohl dem, der seine Hoffnung setzt auf den Herrn!

Wohl dem, der seine Hoffnung setzt auf ihn!

第 1 曲 シンフォニア

[第1楽章] マエストーソ・コン・モート - アレグロ -

[第2楽章] アレグレット・ウン・ポコ・アジタート -

[第3楽章] アダージョ・レリジオーソ

第 2 曲 アレグロ・モデラート・マエストーソ [合唱]

生きとし生けるすべてのものよ、主をたたえよう。

ハレルヤ、主をたたえよう。

アレグロ・ディ・モルト

弦をかき鳴らして主をたたえよう

歌を歌って主をたたえよう。

そして肉なるものはみな、主の聖なる御名をたたえよう。

モルト・ピウ・モデラート [ソプラノ独唱+合唱]

主をたたえよう、わが魂よ

私のうちにあるものよ、聖なる御名をたたえよう。

主をたたえよう、わが魂よ

主がよくしてくださったことを忘れないように。

第 3 曲 レチタティーヴォ [テナー独唱]

(主への賛美を) 唱えるのです。主に救済されたものたちよ

主はあなたたちを苦しみから救い出してくれた

ひどい苦難から、屈辱そして束縛から

あなたたちは、かつて闇のなかに囚われていて

主が皆を苦しみから解放してくれたのです。

唱えるのです。主に感謝し、主の慈悲をたたえるのです！

アレグロ・モデラート

主は、私たちが苦しいときに流した涙を数えてくださる

主は、みずからの言葉で悲しむ者を慰めてくださる。

唱えるのです。主に感謝し、主の慈悲をたたえるのです！

第 4 曲 合唱 ア・テンポ・モデラート

唱えるのです

主によって、あらゆる苦難から救済された者たちよ。

主は、私たちが流した涙を数えてくださる。

第 5 曲 アンダンテ [二重唱 (ソプラノ・メゾソプラノ) + 合唱]

私は主を待ち焦がれました。すると主は私に近づき

私のねがいを聞きいれてくださいました。

主にみずからのねがいを託す者は、幸いである。

主にみずからのねがいを託す者は、幸いである。

Nr. 6 *Allegro un poco agitato* [Ten.]

Stricke des Todes hatten uns umfassen,
und Angst der Hölle hatte uns getroffen,
wir wandelten in Finsternis.
Er aber spricht: Wache auf!
der du schläfst, stehe auf von den Toten,
ich will dich erleuchten.

Recitativo

Wir riefen in der Finsternis:
Hüter, ist die Nacht bald hin?

Der Hüter aber sprach:
Wenn der Morgen schon kommt,
so wird es doch Nacht sein;
wenn ihr schon fraget,
so werdet ihr doch wiederkommen und wieder fragen:

Recitativo

Hüter, ist die Nacht bald hin?
[Sop.]
Die Nacht ist vergangen!

Nr. 7 Chor *Allegro maestoso e molto vivace*

Die Nacht ist vergangen,
der Tag aber herbei gekommen.
So laßt uns ablegen die Werke der Finsternis,
und anlegen die Waffen des Lichts,
und ergreifen die Waffen des Lichts.

Nr. 8 Choral *Andante con moto*

Nun danket alle Gott
mit Herzen, Mund und Händen,
der sich in aller Not
will gnädig zu uns wenden,
der so viel Gutes tut,
von Kindesbeinen an
uns hielt in seiner Hut,
und allen wohlgetan.

Un poco più animato

Lob, Ehr und Preis sei Gott,
dem Vater und dem Sohne
und seinem heiligen Geist
im höchsten Himmelsthron.
Lob dem dreiein'gen Gott,
der Nacht und Dunkel schied
von Licht und Morgenrot,
ihm danket unser Lied.

第 6 曲 アレグロ・ウン・ポコ・アジタート [テナー独唱]

死への綱が私たちに巻きつき
地獄への恐怖におそわれて
私たちは暗闇の中をさまよっていました。
しかし主はおっしゃる「目覚めよ!
眠れるものよ、死者のなかから立ち上がるがよい
私はあなたを照らしてみせよう」

レチタティーヴォ

私たちは暗闇で呼びかけた
「見張りよ、夜はもうすぐ明けるのか?」と

すると見張りは言った
「朝は来る、
しかしまた夜となるだろう。
あなたがたがこうして尋ねてきたのなら、
あなたがたはまたやって来て尋ねるだろう

レチタティーヴォ

『見張りよ、夜はもうすぐ明けるのか?』と
[ソプラノ独唱]
夜は過ぎ去りました!

第 7 曲 合唱 アレグロ・マエストーソ・エ・モルト・ヴィヴァーチェ

夜は過ぎ去り
そして昼が近づいた。
だから暗きおこないはやめ
光の武器を身につけよう
光の武器を手にとろう。

第 8 曲 コラール アンダンテ・コン・モート

さあ、みなで神に感謝しましょう
心とことば、そしておこないで
神はどんな苦しみのなかでも
慈悲深く私たちと向き合ってくれます
神はかくも多くのよきことをなさり
私たちは幼い頃から
神の庇護下にある
だから、すべてのものに慈しみが与えられるのです。

ウン・ポコ・ピウ・アニマート

賛美、栄光、誉れが神にありますように
天の最高位にあらせられる
父に、(神の)子(イエス)に
そして聖霊に。
三位一体の神に賛美を、
夜の闇を遠ざけ
曙の光をもたらしてくれた神に
私たちの歌で神に感謝しましょう。